## 特別な クリスマスイブ

あと 2日で、クリスマスです! なのに、7歳の エミリーと 8歳の お兄ちゃん トミーの 家では、その ワクワク感が 幾分 下火でした。 父親の ジョーンズさんは 健康状態が 悪く、炭鉱の 仕事を 辞め なければ なりませんでした。 母親の ジョーンズ夫人にも、安定した 仕事が ありません。この 4人家族は 今、父親の 障害手当金で 暮らして いますが、それは 4人家族の 必要に 足る 額では ありません。 母親は 服の 修繕や 寸法直しの 仕事から 多少の 収入を 得ることは できましたが、それで なんとか 食料を 買える くらいだったのです。 今年は 特別な クリスマスディナーや お菓子を あきらめなければ ならないでしょうし、ましてや プレゼントなど、買う 余裕も ありません。

エミリーは、店の ショーウインドウで 見た 人形が 欲しいなぁと 思っていました。トミーは 子犬を 飼いたがって いましたが、 父親が 言いました。「犬は たくさん 食べるから、 がたした しまする 余裕が ないんだ。 犬を 飼ったら、 どうやって 家族 みんなを 食わせて いくんだい?」

クリスマスイブの 日、トミーと エミリーは 午後の 間中 ずっと かで、降ったばかりの 雪で 遊んでいました。その夜、夕食の 前に 家族は 集まって、小さな クリスマスツリーに かざりつけを しました。ポップコーンを 糸で つなげ、それを ツリーの 周りに ぐるっと 巻きつけて、毎年 使っている 簡素な かざりつけも ぶら下げました。



クリスマスイブに、みんなで いっしょに ツリーに かざりつけをするのは、ジョーンズー家の 恒例行事でした。そして 深夜の 0時に なると、プレゼントを 交換し、クリスマスキャロルを歌って、シナモン入りの 温かい アップルサイダー (りんご ジュース)を飲むのです。

けれども 今年は、いつもの クリスマスの お祭り気分が どこかへ 吹っ飛んでしまったようです。夕食の 時間に なると、母親は、マッシュポテトと グリルドチキンという 質素な 食事を出しました。食事の 時間は、普段より 静かです。夕食が終わって食卓が 片付くと、エミリーと トミーは 静かに クリスマスキャロルを 歌いながら、ツリーの かざりつけの残りを 終わらせました。

キッチンが 片付くと、母親は 部屋へ 行って ベッドのわきに ひざまずき、祈りました。「イエス様、クリスマスはあなたの 日です。あなたが 一番 大切です。ですが、子供達にはず済まなく 思います。子供達が この日を どんなに楽しみに しているか、あなたは ご存知です。私達に、何が できるでしょう? 子供達に 感じて ほしいのです。どうか、助けて下さい!」続いて 父親の ジョーンズさんが 部屋に 入ってくると、変の祈りを 聞き、すぐに 加勢しました。「そうです、主は、私達にできることを 宗して下さい。私達には、あなたが 必要です!」

しばらく 沈黙した 後、母親は さっと 立ち上がって、 ほぼ笑みました。「あることを 思いついたの!」 母親は きた 夫の そばに 寄って、熱心に それを 説明しました。 2人は いっしょに、屋根裏部屋へ 向かう 小さな 階段を 上って 行きました。



リビングルームでは、トミーと エミリーが すわって じっと ツリーを ながめています。 エミリーが ためいきを ついて 言いました。「もう これ以上は きれいに できないわよね? ツリーと いうより、まるで 洋服掛けだわ。」 そう 言ったことが 自分でも おかしくて、エミリーが 思わず ほほ笑むと、その するく こんは どっと、大笑いしました。

トミーが 言いました。「お交さんと お母さんに、何かの プレゼントを 考えなくちゃね。12時までは まだ 時間が あるし、 何か できることが あるはずだよ。」

2人は じっと 考えこんで いましたが、まもなく エミリーが 一声を 上げました。 「そうだ! 来て、トミー!」 エミリーが 立ち上がって 地下室に 向かうと、トミーも その後に 続きました。 一方 屋根裏部屋では、母親が ミシンに 向かって ものすごい 今日 で 何かを ぬい始めました。部屋の 反対側では、父親が 「ああべツレヘムよ」を 鼻歌で 歌いながら、プレゼントを 作っています。 地下室では、エミリーと トミーが ガラクタの 入った 古い 箱の中を 引っかき回していました。 「見て、トミー! この ピカピカの紙と グリッターで、お母さんの ために 大きくて きれいなクリスマスカードが 作れるわ。」

「ホント、党ペきね! ところで、お父さんの ためには、 何が 作れるかしら?」 エミリーは 興奮しながら 言いました。

「そうだなぁ、この こわれた 飼い葉おけの セットを 置して、 ツリーの 下に 置こうかな。お父さん、びっくりするね。ぼく、 値せると 思う!」と、トミーが 言いました。

こうして、ジョーンズー家は みんな、大忙しに なりました。 トミーと エミリーは 地下室で、気熱と 母親は 屋根裏部屋で。 たがいの している ことには全く 気づかず、自分達の 作業に せっせと 取り組んでいます。



ジョーンズー家の住む ミルフォード通りでは、家々の窓辺でクリスマスライトが輝き、七面鳥の焼ける においや クリスマス用のパイの においが あちこちから 漂っています。 ジョーンズー家の すぐ1 区画 先には、ミラーー家が住んでいました。一家は クリスマスイブのごちそうを食べ終えたばかりで、テーブルを囲んでくつろいでいました。 家は 屋根から 庭先まで、きれいに クリスマスのかざりつけが されていて、玄関には ヤドリギが かけられています。



「そうね、ジョーンズさんが 働けなく なってしまったから、 生活が 苦しいでしょうにね。 何か いい アイデアでも あるの?」 と、 母親が たずねました。

ジュリーは 幾分 ためらいながら 言いました。「あるんだけど、 お母さんが どう 思うか、分からなかったの。」

ジュリーが それを 説明すると、母親が 言いました。 「すばらしい アイデアだと 思うわ。もう おそいから、今すぐ 取りかからなくちゃね。」

できた、ミラー家の 交親は、一般の 前に 整って「ホワイト クリスマス」を 口ずさんでいました。 すると そこへ、 キッチンに いた ジュリーが 飛びこんできました。「お父さん。 ベランダから、 籐かごを 出して もらえないかしら?」

「ジュリー、外は 寒くて 雪も 降っているんだよ。きっと、 雪に うずもれてるよ! 大事な ことなのかい?」と、父親。

「そうなの、お父さん。すごく 大事な ことなの!」と、 ジュリーが 答えました。

ジュリーが 声を かけました。

\* \* \*

を根裏部屋では、ジョーンズ夫婦がまだ 一生けん命に 作業を 続けています。

母親は エミリーのために 作った 人形の 仕上げを しながら 思いました。(やっぱり、今年も ステキな クリスマスに なりそうだわ。)

ジョーンズさんは いとおしそうに 妻を 見上げ、出来上がった ものを 見せて 言いました。「どう 思うかい? トミーに 気に 入って もらえるかな?」

「まあ、あなた、すてきじゃ ない! とっても すてきよ! きっと、気に 入って もらえるわ!」と、母親が 答えました。

妻に すてきだと 言って もらえて ほぼ笑むと、ジョーンズさんは 夫人が 大事そうに かかえている 人形を 見て 言いました。

「まるで お店から 買ってきた ものみたいだね。一体 どうやって たったのか 分からないけど、すばらしい 出来だよ。」 父親は そう 言って、妻を ほめました。



時計が 夜の 11時半を 知らせました。 ミラー夫人は オーブンを開けて、クッキーの 並んだ 次の トレーを 出しました。

(どうして 今年は、こんなに たくさんの ケーキや クッキーを焼いてるんだろうって 思っていたわ。) ジュリーは、用意したいろいろな クッキーや 焼き菓子を 容器に つめ終わると、父親の様子を 見に リビングルームに 走って行きました。

まもなく すると、ドアが 勢いよく 開き、競から つまだまで 雪だらけに なった 父親が 現れました。「取って きたよ、ジュリー。」 そう 言いながら、父親は 籐の かごを テーブルの 上に 置きました。

「お交さん、最高!」 そう 言って、ジュリーは 交親の ほおに キスしました。「じゃあ、お父さん、かごに つめるの、手伝って もらえるかしら?」

ミラーさんは 笑って 言いました。「分かったよ。暖炉の そばに 持っておいで。そこの 方が 暖かいからな。そうしたら、 手伝うよ。」



ー方、ジョーンズー家では、トミーと エミリーが 小さな 木の 声 で 下に 置き、マリヤと ヨセフ、それに 博士達の 人形を 赤ちゃんの イエス様の ねかされている 飼い葉おけの

制りに 並べていました。エミリーは 飼い葉おけの となりに、 作ったばかりの カラフルな クリスマスカードを そっと 置きました。

「お父さんとお母さん、どこにいるのかな?」 添ちゃんのイエス様の 寝床の 下に コットンを しきながら、トミーが 言いました。出来上がったばかりの 飼い葉おけの セットは まるで、命が ふきこまれたかの ようです。本当に、クリスマスらしくなりました。すると、2人が 階段を 降りてくる 足音が 聞こえました。いっしょに 「牧人ひつじを」を 歌う すてきな 歌声も聞こえてきます。

「こっちに 来るわ。」 エミリーが トミーに そう ささやくと、  $^{5 \pm 0}$  2人は にっこりと ほほ笑みました。

リビングルームに 入ってくると、母親が 陽気に 言いました。 「2人とも、ねる 準備を してきたら? それから、みんなで 楽しく クリスマスの 物語を 読むの。どう?」

「はーい。」 <sup>3たり</sup> は そう 答えると、自分達が 用意した ものを <sup>5ようしん</sup> 両親が すぐに 見つけてくれる ことを 望みながら、階段へ 向かいました。

ことできた。 子供達が 見えなくなると、父親と 母親は すぐに、屋根裏部屋 から プレゼントを 持ってきて、ツリーの そばへ 行きました。 「まぁ、見て、あなた!」 キラキラした クリスマスカードと良く 出来た 飼い葉おけの セットを見て、母親は 子供達の 思いやりに かれ 熱く なりました。 父親も、今年の クリスマスに この 飼い葉おけのセットを再び よみがえらせた トミーの 腕前を 誇りに 思いました。

「私達には 本当に すばらしい 子供達が いるわね?」と 母親が 言いました。その時です。時計が 0 時を 知らせると 同時に、ドアベルが 鳴りました。

「一体、こんな 夜ふけに、だれだろう?」 そう 言いながら、  $\zeta_{5585}^{55859}$  父親が ドアを 開けると・・・

「メリークリスマス!」 ジュリーと ミラー夫人が 同時に 声を 上げると、父親の ミラーさんが ジョーンズさんに 手を 差し出して 言いました。「サプライズ・プレゼントです。」

ちょうど その時、トミーと エミリーも パジャマに 着替えて、階段から 走り下りて 来ました。ミラーさん達が 持ってきてくれた 数々の お菓子を 見て、もう ビックリです。赤い リボンで かざられた きれいな かごに、 いろいろな 種類の クッキーや ごちそうが いっぱい 入っていました。

「さあさ、早く入って下さい!」 ジョーンズ夫人は ドアを 大きく 別けて、ミラー一家を 寒い 戸外から 中に 招き入れました。

「長居はできないが、他にもまだあるんだ。子供さん達のためにね。」 そう 言う お客さんと いっしょに リビングルームに 向かいながら、エミリーと トミーは 一体 何だろうと、 2人を 見上げました。 ジュリーは 小さな 包みを 友達に 渡して 言いました。「これは、

エミリーの ため。 開けてみて!」

「うわぁ、何かしら?」 そう 言いながら、エミリーは はやる 思いで 包みを 開けました。

エミリーが 包みから プレゼントを 出すと、ジュリーが 答えました。 「カラーペンよ。エミリーは ぬり絵が 好きでしょ。」

「まぁ、ありがとう!」 エミリーは そう 言って、友達を だきしめました。



「それから、トミーには・・・」 ジュリーが 満面の 笑顔で 言いました。「すごく 特別な もの! お父さん?」

それを聞くと、ミラーさんが最後のかごを持って入って来ました。 緑色の 布が かけられ、持ち手には 大きな 赤いリボンが 結び付けられています。

かごを じっと 見ながら、トミーは 好奇心を かき立てられて 質を 真ん丸く しました。 一体、何が 出てくるのでしょう? すると、トミーの 首が、布の 下から 顔を 出した かわいい 子犬の 首と 合いました。

「子犬だ!」 トミーは さけびました。「ぼくに?」 ミラーさんは やさしそうに うなずいて 言いました。「子犬用の ドッグフードも たっぷり あるぞ!」

「うわぁ! ミラーさん、ありがとう ございます!」 トミーが お礼を 言いながら 父親の 方を 見ると、父親も うなずいて くれました。

「さぁ、私達は本当にもう 帰らないと。 複 おそく なったけど、メリークリスマスを 言いに 来たかったの。」と、ミラー夫人が言いました。

「ありがとう。本当に ありがとう!」 ジョーンズ夫人の 曽は、まだ 涙で ぬれたままです。

「ミラーさん達にも、メリークリスマス。」 と、ジョーンズさんも 言いました。

ミラーー家は 星空の 下を 家に 向かいながら、幸せな 気分に 包まれていました。「贈り物を するって、気持ち いいわね、お母さん?」 ジュリーが ほほ笑みながら 言いました。

「全く その通りね! こういう ことを もう少し ひんぱんに するべきだわ。」 深く 考えながら、母親が 答えました。

「そうする ことを、新年の 抱負に しようじゃ ないか。」 ミラーさんが そう 言うと、みんな 同意して うなずきました。



ジョーンズー家は また リビングルームに 繁まりました。 エミリーが ちらっと ツリーの 方を 見ると、そこに かわいい 人形が ある ことに 気付きました。 町の お店で 見たのと そっくりです。 母親の 方を 見ると、ほぼ笑んで うなずいています。 エミリーは ジュリーから もらった カラーペンを 置き、ツリーに かけ寄ると、もう 1つの プレゼントを だきしめました。

こちらの 方が、お店に あった 人形よりも、はるかに すてきな プレゼントでした。だって、母親が エミリーの ために 自ら 作ってくれた 人形ですもの。「お母さん、ありがとう、本当に すてきだわ。ありがとう!」

トミーも、首分への プレゼントを 見つけました。 「手押し輩だ! 子犬を 乗せて 連れ歩けるぞ。 うわぁ、すごく 楽しく なりそう! お父さん、ありがとう! 最高の プレゼントだよ!」

トミーの 曽が 熱意と 喜びで 輝いているのを 見る だけで、ジョーンズさんは 胸が いっぱいに なり、 環が 自に あふれました。 父親らしい 誇りに 満ちた 表情は かくせません。

ジョーンズ夫人が クリスマス用に 用意していた アップルサイダーを 出してくると、ミラーさん達が 持ってきてくれた クッキーや スナックを いっしょに 食べました。小さな クリスマスツリーの 周りに 座って、 で家は 主の 愛情深い 世話に 感謝を ささげました。

エミリーは 人形を だき、トミーは 子犬を なでながら、ジョーンズ夫人が 出してきた 聖書から 最初のクリスマスの 物語を 読むのに 耳を かたむけました。ジョーンズさんは 大きな 喜びで いっぱいでした。これこそ、本当の 意味での 楽しい クリスマスです。その 特別な クリスマスイブに 一家に もたらされた ちょう これから ずっと、みんなの 心の 中にとどまる ことでしょう。

作者不明 絵:マイク・D 彩色とデザイン:ロイ・エバンス 出版:マイ・ワンダー・スタジオ Copyright © 2019年、 ファミリーインターナショナル

"A Special Christmas Eve"--Japanese 関連の読み物はこちら ⇒ おしみなく与えること、クリスマス、子供のための物語

